

出土した人骨

SD38-C から約350点の人骨が出土しました。人骨は散乱した状態で出土していますが、同一人物の背骨や肋骨が近いところから出土しています。また今回出土した人骨には、成人のほかにも、1次調査の出土人骨には少ない幼児など、若年の個体が含まれています。これらの人骨は、弥生人の生活や習俗、青谷上寺地をとりまく社会情勢を知る重要な資料になると考えられます。発掘調査終了後にさらに詳しい観察を行う予定です。



散乱した状態の人骨



同一人物の背骨



幼児の骨

弥生時代終末期の遺構から出土した木器



木製高杯

花卉高杯の脚部とみられます。大型で赤彩されており裾部にはスリットが入ります。



木製容器②出土状況



琴

弦を天板から浮かせるための材（雲角）が残されている極めて珍しい例です。



木製容器①

優品に用いられるヤマグワの材を素材とし、把手と短い脚部がつくりだされています。



木製容器②裏面

用途は不明ですが、裏面に精密な流水文が彫られています。



妻壁板

建物の壁材で、造成の土留めとして再利用されていました。最も長いものは2.6mあります。



第20次発掘調査における 弥生時代後期後葉（約1800年前）の人骨出土状況



弥生時代終末期（約1750年前）の造成遺構（北東から）



古墳時代前期前葉（約1700年前）の平地建物群（西から）

第20次発掘調査の概要

鳥取県は史跡整備に必要なデータを得るための発掘調査を実施しています。令和4・5年度は2か年計画で遺跡東エリアを対象とした第20次発掘調査を行っています。東エリアは23年前に行われた第1次調査で大量の人骨が出土した溝・SD38の延長部分があると想定されてきた遺跡の最重要地点です。

今年度の調査では、SD38の北側部分の形状や人骨の分布を確認することが出来ました。また、人骨が埋まったのちに行われた造成などを確認し、集落の変遷を考える上で重要な情報を得ました。



第20次発掘調査区の位置

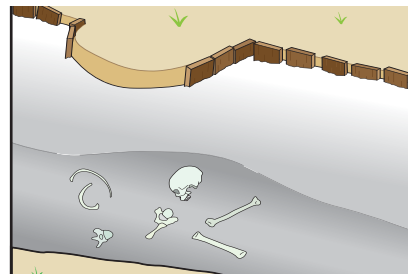
【お問い合わせ先】

とっとり弥生の王国推進課 青谷かみじち史跡公園準備室
〒689-0592 鳥取市青谷町青谷667番地 鳥取市青谷町総合支所2階
電話 (0857) 85-5011 ファクシミリ (0857) 85-5012
ホームページ <https://www.pref.tottori.lg.jp/yayoi-suishin/> Email tottori-yayoi@pref.tottori.lg.jp

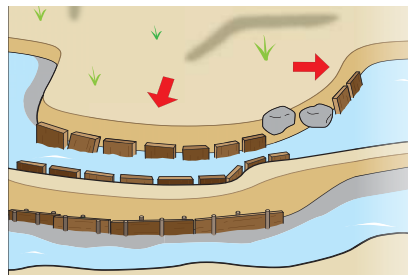
調査成果の概要

- 1次調査の県道8区で調査された弥生時代後期後葉（約1800年前）のSD38-2の北側延長部分（SD38-C）の走向や形状、そこに包含される人骨の出土状況を確認することが出来ました。
- 人骨が埋まったのち、弥生時代終末期（約1750年前）に、中心域を東側に拡張するように方形の張出部を造成していることが分かりました。
- 古墳時代前期前半（1700年前）になると、張出部をさらに拡張して平坦な地盤を造成し、その上に平地式の建物が建てられていたことが分かりました。
- 古墳時代前期後半に集落が衰退し、古墳時代後期（約1500年前）には湿地が広がり、中世前期（約800年前）に水田として利用され始めたことが分かりました。

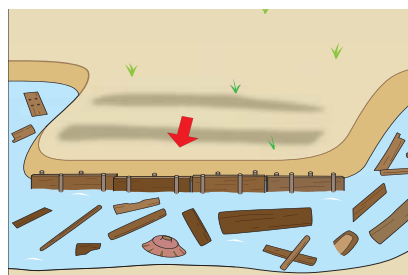
繰り返される土木工事（弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉）



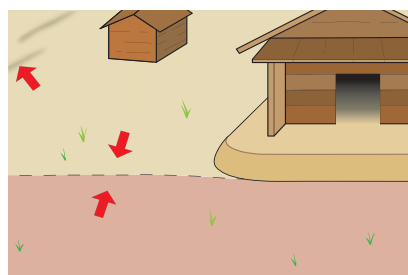
弥生時代後期後葉：SD38-Cに人骨が埋まります。



弥生時代終末期：その上に張出部が造成され、前面には溝が設けられます。



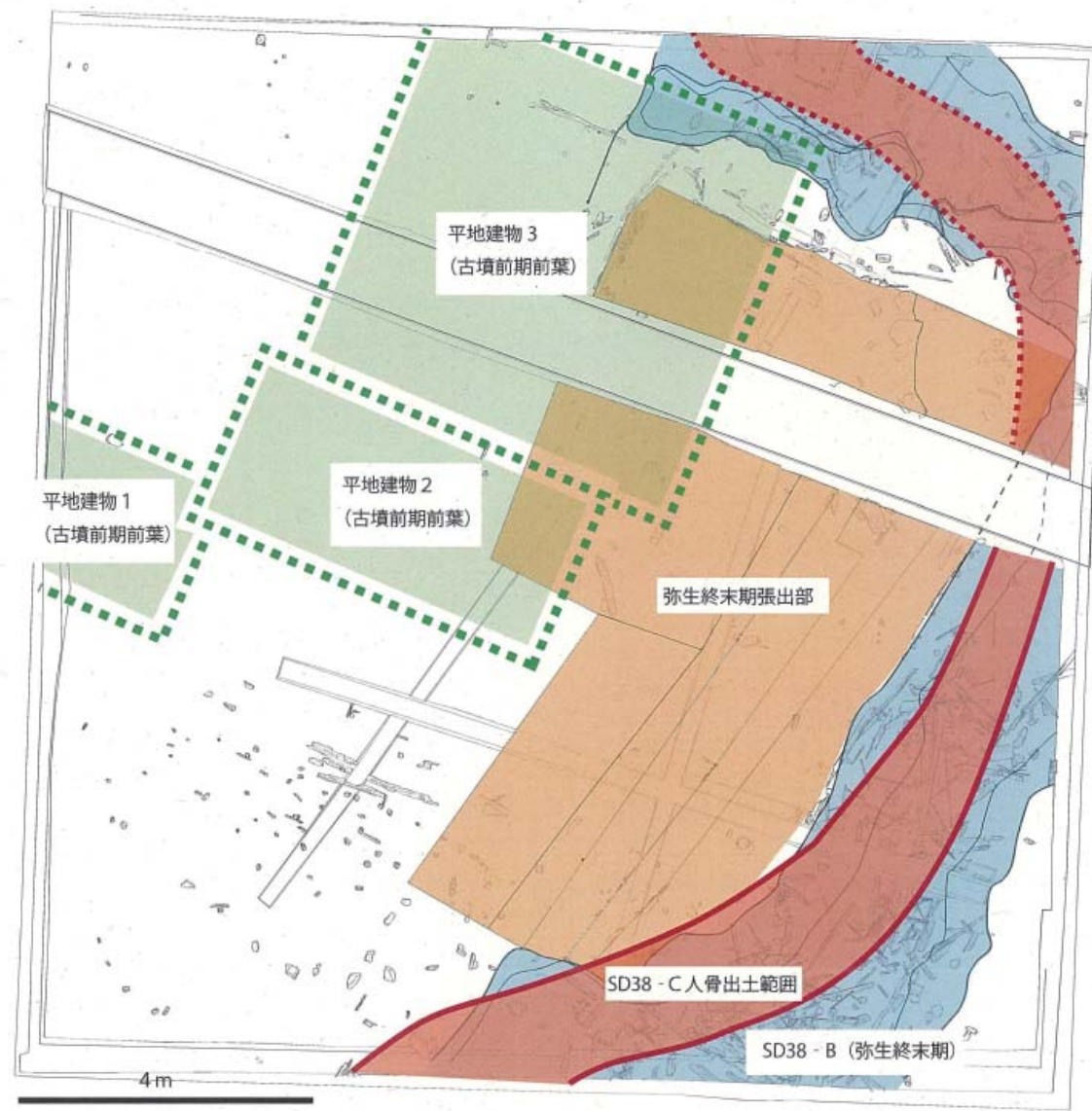
弥生時代終末期：張出部を囲む溝（SD38-B）に大量の木器が埋まります。



古墳時代前期前葉：大規模な造成後、平地式の建物群が建てられます。

調査区内の変遷模式図

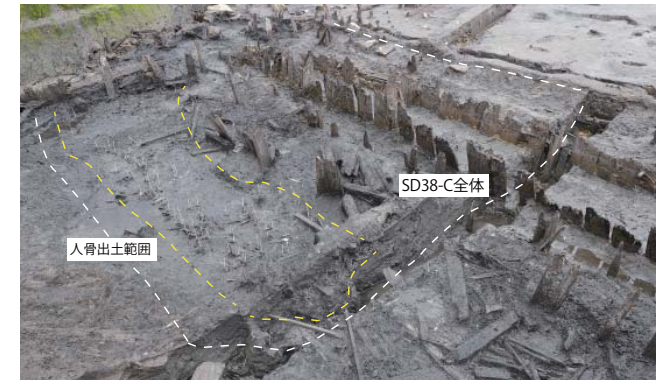
中心域（微高地）の東側縁辺部にあたる当調査区は、標高が低く、地盤が軟弱でした。弥生時代には、この場所を利用するため、盛土による土地の造成を繰り返してました。造成には崩れにくい山土や粘土を用い、土留めとして木製の構造物や矢板を設置しています。



調査区平面図（上が北）

弥生時代後期後葉（約1800年前）

1次調査で人骨が出土したSD38-2の延長とみられる溝（SD38-C）を確認しました。溝幅は約7m、深さは最大で約60cmです。人骨はこの溝が8割くらい埋まり、幅2mほどのくぼ地になったところに包含されています。人骨が散乱する様子は、1次調査のSD38-2の人骨出土状況と共通していますが、当調査区から出土している人骨は1次調査ほどの密度ではないことから、1次調査区から連続する人骨の集積の北端にあたると思われる。



SD38-C 土層断面と人骨出土範囲（北東から）



SD38-C 人骨出土状況（東から）

弥生時代終末期（約1750年前）

SD38-Cが埋まった後に設けられた方形の張出部は、造成時に杭で固定した横板で土留を行っていました。2段階7単位の造成が確認でき、張り出し部の東側には溝（SD38-B）をとまいません。SD38-Bからは大量の木器が出土しました。



木製の土留め（北から）



SB38-B 木器出土状況（南から）

古墳時代前期前葉（約1700年前）

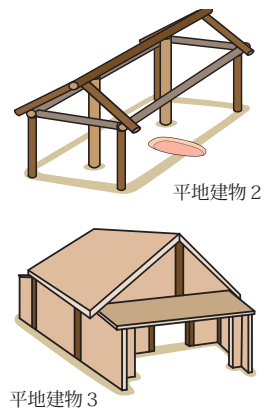
弥生時代終末期には張出部をさらに拡張し、平坦な地盤を造成しています。その上には平地式の建物が立てられました。構造が判明した3棟は、方形に掘削した溝の中に柱や壁を立てる壁立方式の建物です。このうち、平地建物2（2.5 × 5.0 m）は壁の外側まで伸びる炉があり、平地建物3（5.4 m × 5.4 m）は大型の建物で主屋に庇がついていたとみられます。



平地建物2（南東から）



平地建物3（南東から）



平地建物復元図